

第71回埼玉県美術展覧会 審査評

【第3部 彫刻】

○総評

審査主任 小関 良太

今回の審査を行なう中で、私たち審査員も彫刻という表現形態に向き合い、様々な視点から検討し審議いたしました。鑑審査対象となった作品数は79点、入選者数は47点、選外は32点となり、彫刻部としては例年よりも厳しいものとなりました。鑑審査では、主に彫刻として追求された造形力や完成度について検討しました。今日、彫刻による表現は多様化してきており、様々な様相と魅力をたたえています。これまで伝統的に扱われてきた量や面、比例や動勢、釣合いなどの造形言語は、新たな表現形式が現れるたびに新たな捉え方がされてきました。県展に出品される作品は、各々が自分の作りたいものを意欲的に制作されており、一点一点が魅力の萌芽を持っています。そこで、制作の過程で、今日までの彫刻表現で培われてきた造形的諸要素の視点からも検討いただき、より充実した制作体験に繋げていただければと思います。そして県展の会場を、互いに切磋琢磨する場とさせていただきたいと願う次第です。

○埼玉県知事賞

「八月の波の随に」 伊藤 弥生

石で作られたサザエ。殻全体をビシャン、棘はビシャンと磨き、殻の口は磨き仕上げにし、サザエの質感を表現するために多彩な技法を駆使したと思います。特に数ある石材の中から錆石(岐阜県恵那産出)を選んだことには驚かされます。錆石だからできる表情を知り、その素材を巧みに自己の表現方法として使いこなす作者の度量を感じます。鑑賞者がサザエ越しに見る景色は、明るく、そして青く広がる夏の空と海ではないでしょうか。そして、その景色の中に自分自身を発見するかもしれません。それは波音に心が洗われ、日常とは違う自分。夢と希望、明るい未来を見つめた自分。現代を生きる我々に問いかけてくる作品です。

○埼玉県議会議長賞

「Mask」 本多 史弥

力強く量感のあるフォルムがシンプルな面で再構成された半身像です。作品からは、作者の意図する彫刻感が伝わってきます。素材であるテラコッタのもつ温かな質感を活かしつつもクールな内面の表現は、左手に持つマスクの表情とのコントラストによって効果的に描き出されているようです。また一方で、テーマの説明に偏らず誠実に彫刻に対峙している姿勢もよい点です。しっかりしたデッサン力と人体表現の研究によって作り出される作品は、今後の展開を期待させます。

○埼玉県教育委員会教育長賞

「camel bike」 神藤 槇

作品を表現し、発表する責任において、作品には何らかのメッセージがなくではなりません。作品にメッセージを吹き込むためには高い技術力、思考力等が必要です。クスの木を素材にした寄せ木づくりの大作で、ラクダがヘルメットを被り、背中のコブが開く様はユニークです。制作している時の素朴な楽しさ、高揚感、一生懸命さが伝わり、観るものを楽しくさせる作品となっています。ただ、この作品の題名からして思い切ったデフォルメをしてでもスピード感が出る工夫が欲しかったと思います。

○埼玉県美術家協会賞

「^{しあわ}幸^{とま}せの^ぎ止り木」 ^{うちだ}内田 ^{ふみえ}文江

この作品は、人体をモチーフに樹木のうろを思わせる空間を作り出し、フクロウの巣に見立てています。乾漆風の着色は、自然に溶け込むような印象を与えています。正面と裏面の構成、表現は大きく異なっていて多方向から鑑賞することを意識した彫刻作品です。形や色の面白さだけでなく、「家族の絆」、「生命の営み」、「環境保護」、「共生」・・・どのようなテーマが隠されているのかを考えたくなる面白さがある点を評価しました。樹木に見立てた人体部分に伸びやかさと、巣穴のフクロウを塊で表現する工夫があるとさらに世界観が広がるように思います。次作を楽しみにしたいと思います。

○埼玉県美術家協会賞

「^{さきゅう}砂丘」 ^{かわむら}川村 ^{ひろこ}浩子

84 cm FRP の立像です。小さいながらも、力強さを感じる作品となっています。また、人体の構造をよく理解し、全体の調和を意識しつつ、細部まで丁寧に仕上げた本作品は、作者の技術の高さがうかがえるものとなっています。

○産経新聞賞

「^{ちゅうてつ}鑄鉄の^{ちょうどひん}調度品」 ^{はせがわ}長谷川 ^{ぜんいち}善一

鉄を鑄造して作られた作品には圧倒的な重厚感、存在感があります。それは、鉄の比重が7.85（一般的に石が水の約3倍、鉄が8倍）という物理的なことではなく、この重い鉄を素材に選んだ作者が長年の制作で鉄を扱う技術を習得し、鉄の個性と可能性を十分に理解し、作品を表現の世界に昇華させたからです。意識して錆びさせた3本の足と黒光りする天板は、過ぎ去った時間だけでなく、この調度品が見てきた人々の人生やドラマ、更にはこの調度品が見る未来をも想像させるのです。

○高校生奨励賞

「^{つよ}強い人」 ^{ひと} ^{くどう}工藤 ^{あやね}彩音

高校生の作品として云々ではなく、大変にしっかりとした彫刻(自刻像)だと思います。何がそう感じさせるのかと言うと、モデル(自分)をよく観るところから出発し、手探りで試行錯誤することが、かたちを生んでいるということなのでしょう。何か変わったことで目を引こうとか、変な欲や身の丈に合わないことをやっていないことに純粹さが感じられます。ともすると我々も忘れてしまっていないか問われるようにも思います。未来ある作家になることを焦らず、考えて生きること、制作することで世界と対峙して行って欲しいと願っています。

○埼玉県美術家協会会長賞

「^{かげ}翳り」 ^{あべ}阿部 ^{まさよし}昌義

^{そぞう}塑像で制作された、品を感じさせる女性の半身像です。造形力の高い作者は、人体具象彫刻をモダンに捉えようとしています。モデルから感じ取った線の勢いが美しく、女性の佇まいを捉えています。毛髪や衣服の^{ひだ}襞などに量的なバランスの検討がされており、造形的な処理のセンスが生きています。また、着色は形態感や量感を弱めることなく行われ、再現だけでない工夫を感じさせます。

○高田誠記念賞

「雲」 ^{くも} 矢島 ^{やしま} ^{ひでよし} 秀吉

作品(立像に限らない)をどう立たせるか?これは彫刻家がものをつくるうえで、根本的に大事なことです。その点で企てが成功していると思います。彫刻そのものが空間を巻き込み、小品でありながら、スケール感を持っています。色々な考え方もありますが、あえて石膏をそのまま見せることには、媚びることのない自信も感じ、好感を持ちます。作品の小ささが災いしているのでしょうか、やや部分に走り、うるさいところが問題です。審査員の多くから、大きな作品で勝負して欲しいという声がありました。来年以降の課題として捉えて頂けたらと思います。